

**J.M.ケインズ「若き日の信条」「自由放任の終焉」** My Early Beliefs, The End of Laissez-Faire 『世界の名著 ケインズ／ハロッド』所収

若き日の信条[1938→1949]

■ ムーア『倫理学原理』の影響：「自己の魂の救済」vs「社会奉仕」

・「私がケンブリッジ大学に入学したのは、1902年のミカエルマス学期（10月1日から始まる新学期）であり、この第一学年の終わりには、ムーアの『倫理学原理』が出版されている。…われわれにとっては、もちろんこの書物の与えた影響と、出版の前後に行われた議論とは決定的に重要なものであった。」(112)「まさに、それは刺激的であり、人を鼓舞するものであり、ルネッサンスの開幕、新天地の開闢（かいびやく）であった。」(113)

・ケインズは、ムーアのいう「宗教」を学んだが、ムーアのいう「道徳」は捨てたという。「実際、われわれの意見では、彼の宗教の最大の利点の一つは、宗教が道徳を必要としないところにあった。すなわち、『宗教』を、自分自身、および絶対者に対する人間の態度と定義し、『道徳』を、外部の世界、および自己と外部の間の媒介物に対する人間の態度と規定しているからである。」(113)

・【宗教】：行動や成果、あるいは帰結とは関連づけられない「心の状態」であり、それは、時間を超越した、瞑想と深い内省[communion 共鳴]の極致である。その「適切な主題は、最愛の人、美および真理であり、人生における主目的は愛であり、審美的体験の創造と享受であり、また知識の探求であった。このうち断然愛が第一の目的であった。」(114)

・「われわれの宗教は、自らの魂の救済の重点を置くイギリス清教徒の伝統を忠実に踏襲していた。神は、われわれの閉鎖的な世界の内部に住んでいた。『善である』ことと、『善を行なう』こととのあいだには、あまり密接な関係はなかった。われわれの感じでは、実際は後者が前者を妨害する危険すらあった。しかし、本来の宗教というものは、近代の『社会奉仕』(social service)を唱える疑似宗教とはまったく違い、つねに高潔なものであった。たぶん、われわれの宗教が全く反世俗的なものであって、富、権力、名声、あるいは成功、それらのどの一つに対しても関心を示さず、全く軽蔑していたということがそれを完全に示している。」(114-115)

・「宗教」＝「善であること」（心の状態としての善）は、「愛と美と真理という対象との統一」(116)であり、それは「直感」の問題とされる。直感について意見が相違する場合には、「より鋭敏な判断力をもっている」人が、基準となる。「實際上、議論で勝利を収めるのは、[つねに]明晰で疑問の余地を残さない確信を、最も上手に表現しえた人物、難攻不落の語り口を最大限に利用した人物であった。」(115)

・「われわれは、有用な知識は無用な知識よりも好まれうるという考えを強くしりぞけようとした。」(117)

・「短期間しか持続しない激しい愛は、長く持続する生ぬるい愛よりも善いものであろうか。われわれは然りと考えた。」(117)

・ムーアの方法論によると、「本質的に漠然としている観念でも、それに関して明確な言葉を用い、正確な問いを発することによって、はっきりさせることができるはずであった。それは、完全無欠の文法と不明確さの全くない辞書とを用いることによって、発見すると

いう方法であった。」(117-118)

### ■ 快樂の否定

・快樂の問題：「われわれの一般的見解によると、快樂は、この場合なんの関係もなく、概していえば、心の快い状態は、緊張と情熱に欠けているという深い疑念にさいなまれる状態であった。」「[メンバーの中の二人は、]心の善き状態は、すべてきわめて苦痛なものであるとつぶやき、すべての苦しい心の状態が善の極致であると言わぬばかりであった。」「ムーア自身は、快樂を、それが否定されるとき、状態の改善に役だつものとしてしか受け入れない立場であった。」(119)

・「プラトンの善のアイデア、スコラ哲学、カルヴァンの禁欲主義、ウェルテルの悲しみ」(教養) + 「虚栄の市の快樂」(俗物性)。この二つの要素で成長したという。(120)

・「顧みると、われわれのこの宗教は、そのもとで成長していくには絶好のものであったと、私には思われる。」「われわれの宗教は、…今でも、依然として、私の内面の宗教である。」(120)

・「社会的行為のみならず、行為の生活一般、すなわち経済的動機や経済的基準に伴う権力、政治、成功、富、野心といったものも、われわれの哲学においては、せいぜい小鳥のために寄付を募ったアッシジの聖フランシスほどにも重要ではなかったのである。要するに、われわれは、我々の世代の中でベンサム伝統から脱出しえた最初の、またたぶん唯一のグループだったのである。もちろん、実際は、少なくとも私に関するかぎり、外の世界を忘れたり、否認したわけではなかった。」(123-124)

・ベンサム主義の否定：「今日では私は、ベンサム主義的伝統こそ、近代文明の内部をむしばみ、今日の道徳的退廃に対して責任を負わねばならない寄生虫であると考え。われわれは、キリスト教を敵とみなしていた。というのは、それが伝統と因襲の呪術の代弁者として現れたからである。しかし、一般の人々の理想の質を破壊しつつあったのは、経済的基準の過大評価に基づいたベンサム流の計算だった、というのが真実である。」(124)

### ■ 合理主義者にして不道徳者ケインズ

・「われわれは、慣習的道徳や、因襲的、伝統的な知恵を完全に否認した。いわば、われわれは厳密な意味で不道徳主義者であった。」「しかしながら私に関するかぎり、この考えを変えるのは、今となっては遅すぎる。私は相変わらず不道徳主義者のままでいるし、今後もずっとそのままでありつづけるだろう。」(125)

・「われわれは最後のユートピア主義者であった。すなわち、道徳の連続的進歩を信じ、その進歩のおかげで、人類はすでに、真実と客観的諸基準によってのみ影響をうける、信頼に足る、合理的で卑しくない人々によって構成されていると信じ、これらの人々は、因襲や伝統的基準や融通のきかぬ行動規範の外面的な諸拘束から解放され、将来に向かっては、気のきいた創意と純粋な動機と信頼するに足る直感とに、自由に委ねて行動する人々であると信ずる、最後のいわゆる世界改善論者 meliorists (現世は最善でも最悪でもない。人間の意志と努力によって改善しようという主張をするもの) であった。」(125-126)

・ケインズは、「人間の本性が合理的であるという見解」を受け入れた。「その根底に流れていたのは、一般的善を標榜したカントやベンサムの普遍的倫理学と同様に、利己主義——合理的利己主義とも呼ばれた——の倫理であった。そして、その利己主義が、合理的で

あるがゆえに、利己的制度和利他的制度とが、いずれも現実において、おなじ結果をもたらすと考えられたのである。／要するに、われわれは、原罪説、すなわち、ほとんどの人間に、狂気じみた非合理的な邪悪さの根源があるという説について、いかなる変種も、これを否認した。」(126)

・「われわれは、自分自身を含めた人間の本性を、われわれの一般的な心の状態の因果関係であると、全く誤って理解していた。われわれが人間の本性に属すると考えた合理性のために、判断の浅薄さばかりでなく、感情の浅薄さをもたらすことになった。われわれは、知的にはフロイト主義者以前であったのみではない。われわれは、先人たちがもっていたものを、ほかのものにとりかえることなく失ってしまったのである。今でも、私は、偽りの合理性を他人の[そして、疑いなく私自身の]感情や行動に結びつける性癖が抜けきれず悩んでいるのである。」(126-127)

・「人間の本性の、自然発生的な非合理的な発現のあるもののなかには、われわれの図式化が切り捨てたある種の価値が見いだされるのである。悪徳に結びついたある感情さえ価値をもちうる。自然発生的で激烈でよこしまでさえある衝動から生じた価値のほかにも、われわれの知っているものを超えたところに、価値ある瞑想と深い内省の対象がたくさん存在するのである。すなわち、諸社会間の生活の規則やパターンに関するものや、それらが抱かせる感情などがそれである。」(127)

・「思うに、われわれは昔、美的鑑賞の領域を法外に拡張し、実際は人間的経験であるものをすべて美的経験として分類し、この誤った分類方法のために人間的経験を不毛なものにすることによって、非常に多様な経験の周囲を歩きまわっていたのである。」(128)「この薄っぺらな合理主義は溶岩の外殻(がいかく)の上を飛びまわり、通俗的な情熱の存在と価値とを無視し、自由思想と最も広い意味における不遜とに結びつき、…知的な品位によってオットリンのような驚くべき札つきのかぶれ屋を誘惑したのである。」

\*オットリン・モレル(1873-1938):「レディ・チャタレー」のモデルとされる女性。「貴婦人の異端児」と言われ、20世紀前半のイギリス社会に特異な足跡を残した。当時の知識人たちは、その強烈な個性に惹かれて彼女の邸に集い、作品のなかで戯画化した。長年、ブルームズベリー・グループの中傷にまみれ、「パートランド・ラッセルの愛人」として語られてきた。伝記として、ミランダ・シーモア著『オットリン・モレル 破天荒な生涯:ある英国貴婦人の肖像』蛭川久康訳、彩流社、2012年がある。

## 自由放任の終焉[1926]

### ■ 自由放任論の二つの特徴

・**アダム・スミスの予定調和論**:「私的利益と公共善との間の、神の摂理による調和という思想」に「適切な科学的根拠を与えたのは経済学者たちであった。自然の作用によって、個人が自由のための諸条件を切り開こうとして自己の利益を追求するとき、つねに、同時にそれが公共の利益の増進に役立つことになる、と想像してみよ!…[i]干渉する権限は政府にないとする哲学的教義と、そして、[ii]干渉そのものを不要にする神の奇跡のほか、[iii]政府の干渉は有効ではないとする科学的論証がつけ加わったのである。この考えは、

まさにアダム・スミスのなかに発見できる第三の思想の流れである。」(136)

・適者生存の原理：「経済学者たちは、富、商業、機械は自由競争の賜物であり、自由競争がロンドンを築き上げたと教えた。しかし、ダーウィン主義者は、一歩進んで、自由競争が人間を造ったと説いた。もはや、人間の眼というものも、奇跡的にすべてのものに最善の結果をもたらすように仕組まれた神慮の現れではなく、むしろ、自由競争と自由放任の条件のもとにおいて作用する偶然のもたらした最高の成果にほかならない。」(137)

### ■ 初期の自由放任論

・「われわれをして自由になさしめよ[レッセ・フェール]、という格率は、17世紀の末葉、コルベール[ルイ 14 世の大蔵大臣を勤めた政治家で重商主義の代表者]にときおり進言していた商人ルジャンドルのものと言いつたえられている。しかし、この言葉を書物の上で最初に用い、しかも、それをこの教義にはっきり関連づけて用いたのは、1751年ごろのアルジャンソン侯爵であったことは疑問の余地がない。侯爵こそは、政府の経済的利益は、取引を干渉しないことであると、熱っぽく説いた最初の人間であった。」(139-140)

### ■ 功利主義・二流経済学者・啓蒙書から生まれた自由放任論

・「アダム・スミスは、もちろん自由貿易主義者であって、18世紀のさまざまな貿易制限に対する反対者であった。しかし、航海条令と高利禁止法に対する彼の態度を見れば、彼が教条的な自由放任主義者ではなかったことがわかる。」(140)

・「功利主義哲学に用いられていた形で自由放任の法則が発見されたのは、じつはわれわれが、経済学者ではなかったベンサムの後期の著作に接したあとのことであった。」(140-141)

「この時以来、自由貿易のための政治運動、いわゆるマンチェスター学派の影響とベンサム流の功利主義者の影響、二流の経済学者の発言、マーティノー女史とマーセット夫人の啓蒙書などが相まって、正統派政治経済学の実践的結論として自由放任思想を一般の人々の心に定着させたのである。」(141-142)

・自由放任主義を最初に批判した正統派経済学者は、ケアンズ（『政治経済学と自由放任』1870年）であった。これにマーシャル『経済学原理』が続く。

### ■ 自由放任論の二つの礎石

(1) 自由市場のもとでの自然淘汰が、進歩をもたらす。

(2) 「貨幣愛」という最も強力な人間的動機の一つが、私的な金儲けの機会を最大限に引き出し、最大限の努力を引き出す誘因となる。「ダーウィンが、効果的であると同時に望ましい線にそって進化をおし進めるものとして、競争による自然淘汰と並んで、その補助として雌雄淘汰の過程で作用する性愛 sexual love に訴えたのと同様に、交換価値で測って最も望まれるものについて、可能なかぎり大規模な生産を実現するために個人主義者が訴えたのは、自然淘汰の補助として利潤追求の過程で作用する貨幣愛 love of money であった。」(147)

### ■ 自由放任主義批判

・「個々人が、その経済活動において、長い間の慣習によって『自然的自由』を所有しているというのは本当ではない。持てる者に、あるいは取得せる者に永遠の権利を授ける『契

約』など一つもない。世界は、私的利害と社会的利害とがつねに一致するように天上から統治されているわけではない。世界は、現実のうえでも、両者が一致するように、この地上で管理されているわけでもない。啓発された利己心は、つねに社会全体の利益になるようにはたらくというのは、経済学原理からの正確な演繹ではない。また、利己心が一般に啓発された状態にあるというのも本当ではない。個々人は、各自別々に自分の目的を促進するように行動しているが、そのような個人は、あまりにも無力であるために、たいてい自分自身の目的すら達成しえない状態にある。」(151)

### ■ 分権統治と社会化の理想

・「多くの場合、支配と組織の単位の理想的な規模は、個人と近代国家の中間のどこかにある、と私は信じている。それゆえに、国家の枠内に『半自治組織』semi-autonomous bodiesの成長を図り、その存在を容認することこそ進歩である、と私は考えたい。」(152)

・「われわれは、時代の自然の趨勢を十分に利用しながら、おそらく、国務大臣が直接責任を負う中央政府の機関よりも、『半自治的な法人』semi-autonomous corporationのほうを選ぶべきであろう。」(153-154)

・分権的自治の例として、大学、イングランド銀行、ロンドン港湾局、鉄道会社などが挙げられるが、「これらの例よりも興味深いのは株式会社の動向である。」

・**株式会社の社会化による解決**：「大会社[の規模]…がある一定点に到達すると、資本の所有者すなわち株主が経営からほとんど完全に分離され、その結果、多額の利潤を得ようとして個人が直接経営に示す関心は、まったく副次的なものになってしまう。この段階になると、経営によって払われる考慮は、株主のための利潤の極大化よりも、組織の一般的安定と名声のほうにずっと傾くことになる。株主は、慣例上妥当とみなされる配当に甘んぜざるを得なくなる。しかし、ひとたびこの配当が確保されると、経営の直接的関心は、社会からの批判と会社の顧客からの批判を回避することに向けられるのがしばしばである。とりわけ、会社の規模が大きいか、ないしは半独占的地位を占める場合には、公衆の眼につきやすく、また、社会から攻撃を受けやすいため、なおさらそうである。」(152-153)

・「社会化のもたらすものが利益ばかりとは言えない。この同じことが原因して、保守主義が助長され、企業の衰退の度が速められる。事実、このような形で、国家社会主義 State Socialismの長所とともに、多くの欠陥をわれわれはすでに見てきた。それにもかかわらず、ここには、進化の自然の流れが見てとれるように思われる。無制限な私的利潤に対する社会主義の闘いは、時々刻々、細かい点においては、勝利を収めつつある。」(153)

### ■ 自由放任主義を克服するための政策

・**通貨管理と情報収集/公開**：「現代における最大の経済悪は、危険、不確実性、無知に原因するところが多い。富のはなはだしい不平等が生ずるのも、境遇ないし能力に恵まれている特定の個人が不確実性および無知につけ込んで利益を手に入れることが可能であるからであり、また、同じ理由に基づいて、大企業も、しばしば、富くじと同様、危険なものとなっているからである。そればかりではない。同様の諸原因がもととなって、労働者の失業、ないし合理的事業期待の破綻、能率と生産の減退等がもたらされている。」→「これらの事柄に対する治療法は、一つには、中央機関が通貨および信用を慎重に管理することに求めるべきである。そして、もう一つには、必要とあらば法律に訴えてでも知るに値す

る、すべての企業実態を全面的に公表することをも含めて、事業状況に関する情報を大規模に収集し、普及させることに求めるべきである。」(155)

・貯蓄と投資:「私の信ずるところでは、社会全体としての望ましい貯蓄の規模の決定とか、この貯蓄が対外投資の形で外国に出てゆく規模の決定とか、そして、現在の投資市場組織が、貯蓄を国民的に見て最も生産的な径路に配分するものであるかどうかの判断——などについては、何らかの形で、知的判断力の調整行為が必要である。このような決定が、私的判断と私的利潤のなすがままに放任すべき性質のものであるとは私は思わない。」(155)

・人口:「今や各国は、人口の規模について、現在よりも大きくするか、小さくするか、そのまま維持するか、このうちのどれが適切なのかについてよく考え抜かれた国民的政策を必要とする時代にすでに到達している。」(155-156)

### ■ 資本主義の改革

・「われわれが当面の問題に対処するに際して、できるだけ多くの貨幣動機に訴える方法よりも、できるだけその方法に訴えない方法を選ぶべきかどうかは、必ずしも全く先験的なことではなくて、むしろいろいろな経験の比較に基づいて決定されることであるかもしれない。」(157)

・「私としては、資本主義は、懸命に管理されるかぎり、おそらく、今までに現れた、いかなる他の制度よりもいっそう有効に経済目的を達成するのに役立つものであるが、それ自体としてみる限り、資本主義は多くの点できわめて好ましくないように思われる。われわれの問題は、満足のゆく生活様式というものに関するわれわれの考えに逆らうことなしに、できるかぎり効率の高い社会組織を苦心しても創り出すこと、これである。」(158)

・「次の一歩前進は、政治的扇動とか時期尚早の実験によって生ずるのではなくて、思想から生じなければならない。われわれには、頭脳の努力によって、自分自身の感情を説明する必要がある。現在のところ、われわれの同情心とわれわれの判断とは両極に分裂しがちであるが、このような状態は、知性の痛ましい麻痺状態にほかならない。」(158)